

【みすず書房：31頁下段～45頁】

オリヴィエ 民衆の集會に初めていく

思想の平板さ、表現の無趣味で野蛮な重苦しき、思想として漠然と大雑把なこと、幼稚な理論・

⇒文学的表現における単純率直とは、修練して初めて達しうるものであること

—それは選良の獲得物であることをオリヴィエは忘れていたのであった。

クリストフ 民衆の家の中に自分で入っていく

アルシード・ゴーチェ：45歳、小柄、老けてみえる、頭髪は薄い、眼が凹み、頬がこそげ落ちて

- ・中産層出身、良い家庭に育つが教育費が底をつき若くから役所勤務
- ・労働夫人と結婚、3人の子供、
- ・毎日機械みたいな仕事、生きながらの死、同僚は粗野で饒舌で悪口ばかりでだらしない
- ・家の中だらしない仕様、悪い匂い、騒々しい
- ・子どもたちは妻に似て、自分には一切似ていない

⇒「一体、これが当然なことなのか?! 万事これで正当なことなのか?!」

すべてを忘れたい、酒浸りになっていた。

共鳴と羨ましさの気持ちからクリストフにしがみつく。

- ・党派との結びつきは社会に対する恨みのためだった。
- ・失意の貴族、民衆の仲間入りをするのがつらくてたまらなかった。

クリストフ：

ゴーチェよりもずっと民衆、民衆の一人であることを何も思わない、集會を面白く思う。

⇒美辞麗句の内容はよく解ろうとも努めず、クリストフは弁士と民衆のあいだに、

その雄弁によって生じている音楽を聴き取っていた。

カジミール・ジュシェ：30～35歳、やせていて、病身そう、眼光強く冷静、頭髪は薄い、あごひげ

- ・外見や饒舌の特徴よりも、彼の人格とその人格から放射する確信の強さ
- ・人々が期待していることを大衆にむかって三度、四度、十度と繰り返す言う。
激しく頑強に、何度も。全民衆もその気になり彼を真似る。釘が身軀の中へ打ち込まれる。
- ・(経歴) 民衆に説得力を持たせる。政治的論文で何度も有罪。不屈の力を発している。
- ・(実際) 結核に蝕まれ、子どものときからの生活苦、あらゆる職業を経験。
- ・心の底に積み重なる疲労の重さ、多くの努力苦勞に嫌気が差し、自分の運命に憤っている。

シモン： ゴーチェの元同僚。サンディカリストたちが集まるレストランの経営者

ベルト：ジュシェの愛人、丈夫でコケット、皮膚は青白く、髪は燃えるような赤を含んだ金髪、
笑をたたえた明るいまなざしはいつもあちこちに動いていた。

レオポール・グライヨー：

- ・ベルトが連れて来た美しい青年、洒落た身なり、利口そうで気取り屋。
- ・機械工、耽美主義者、自称アナキスト。
- ・ブルジョワジーに反対する最過激者の一人であるくせに、最も良くないブルジョワの魂
- ・エロチックでデカダンな小説を毎朝沈読
- ・快楽の空想、清潔さを欠き、ぞんざいな生活法
- ・空想によって享楽を味わい、それによって金持ちたちと同等になり、金持ちを憎悪する
⇒クリストフはやりきれない

セバスチャン・コキヤール：電気技師、40歳、がっしり、顔は大きく血色良い、頭の形は丸い・・・

- ・クリストフが一層の好意を感じている
- ・ジョシュと共に民衆集会で最も重んじられる一人
- ・生粋のフランス人
- ・ジョシュと同様労働者として優秀、愉快的談笑と酒が好き。
- ・ジョシュとは正反対、2人は友達だったにもかかわらず、密やかな敵意が育っていた。

オーレリー：レストランの主婦、45歳の良い婦人、若い時はよほどの美人、今も美人

- ・嫁いでいる娘、7歳の女の子、10歳の男の子（15歳で死ぬ）
⇒生命力が強く、過ぎたことのためにぐずっていることはできない。
どんな運命にも自分を適合させて生きていた。
- ・若い時はブルジョワの愛人を持ち、今は労働者と結婚して家庭の良い母となる
⇒愛欲からの人の心の愚かさについてはすっかり理解している

朗読① みすず書房：37頁～38頁

オリヴィエがジョシュのひそかな悲劇に気づく

- ・彼を嘔み滅ぼしている病気
- ・彼の情婦、ベルトの仕打ち
彼女が気ままに愛することは禁じない（男も女も自由の権利があると自ら公言している）
自由を支持する自身の理論 VS 自らの激しい本能＝苦しい戦い
⇒オリヴィエは自分も経験上、そのひどさを味わったことがあるため、彼に同情する。
ジョシュは見抜かれていることへの敵対と憎しみを強くする。

クリストフ：オリヴィエの気づまりにはきづかない。

人の心理を読み取ろうともせず、飲み、食べ、笑い、怒り、議論する。

民衆はクリストフには不信を抱かない。多くの組合に接する。

クリストフの力強い個人主義が反抗的に立ちあがる。

「闘争へ前進するためには互いを鎖でつなぎ合わせずには居られないこの人々を、
軽蔑せざるを得なかった」

「この結合の中には、あまり善良でもけなげでもない人々も混ざっていて、
全部の人々は彼らの権利と彼の力の自負に満たされており、
そしてそれらの権力と力とを濫用する気になっていた。」

⇒第8巻「家の中の」で出会った善良な人たち・・・

クリストフ&オリヴィエ

- ・革命主義者たちが説き、実行していた権力の乱用に反感を感じる
- ・オリヴィエ「どの帝国主義をも採らない。抑圧されている人々に味方する」
水流には巻き込まれず、岸から静観することを選択。
- ・クリストフは反抗する労働者たちについて行くうちに力の潮の中へ引きずり込まれた。

朗読②：みすず書房 43 頁から 44 頁

クリストフ

- ・ますます熱情にかられ、一層革命主義的なことを言い出す。労働者は腹を立てる。
- ・クリストフの知性的な誇りや精神の喚起のためにつくられている純然と美的な考えは隠れていた
- ・「われわれの価値は君たちの価値より大きい！」
- ・ますます酔い、雄弁になることに自分でも驚くが、重大視はしない。酒のせいだ。
- ・クリストフが熱意を増すほど、周りは引いていく。

※ブルジョワに恐れられる来週（労働者）も、根本のところはぐらつき、ひどくブルジョワ的だった。

コキヤール：自分で言うことの半分しか信じていない。大きなことを笑いあつて、表面的な共感。

グライヨー：一切を批評、一切を捨て流す

ジュシェ：確言ばかり。自分に固執してますます悲観的

他の労働者：同じ

⇒彼らは実際、寝そべて資料と夢想とをゆっくり反芻したい、ということ以外は何も考えない、
疲れ切っている動物だった。

- ・指導者をいつも求めるが、たちまち猜疑して捨てる、また求めるの繰り返し。
- ・指導者の大方は女と金に蝕まれている。信念と思想に欠け、死ぬだけの勇敢さをもった者は僅か。

⇒この根本的な弱さが革命の命脈を切った。 朗読③：みすず書房 49 頁